

## パスカルの自然および人間観：その思想の背後にあるもの

上田, 富美子  
九州大学医療技術短期大学部

<https://doi.org/10.15017/118>

---

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 8, pp.17-23, 1981-03-25. 九州大学医療技術短期大学部  
バージョン：  
権利関係：

## パスカルの自然および人間観

— その思想の背後にあるもの —

上 田 富 美 子

Vue de la nature et l'homme derrière  
les pensées de Pascal

Fumiko Ueda

今まで諸々パスカルについて論じてきたところから、私は一つの避けて通れない重要な問題の前に、おのずから立たされている自分に気付く。それは多分、表面にあらわれないにしても、この思想家の考え方の背後に、つねに底流として潜み続けてきたものではないか。この点への何らかの解明が果されないうち、彼の思想への根本的接近は、はかれぬのではないか。そういう思いをいよいよつよくさせられるのである。そして、それはおそらく、ひとりこの思想家のみにかかわることではなく、もっと普遍的な問題でもあるに違いない。ただ、この思想家の特異性は、その思索の稀有な透徹性のゆえに、明確なかたちではないにせよ、同時代人の誰よりも、すでにその限界を予知し、その先取りされた苦悩を、病弱の身一身の上に負わされたことにあった。底流を探ることは、もとより、表層に汲むことより、多くの困難を伴うに違いないが、あらい素描なりとも呈示することができれば、さいわいと考える。そして、それは多分、今日に生きる私たち自身にとっても、無関係な事柄ではないであろう。なぜなら、私たちが、パスカルの生きた時代の継承の中に置かれていることは、まぎれのない事実なのだから。

パスカルの思想において最も特徴的なことは、さきの小論でも触れたように（短大紀要第6号「パスカルの人間観」参照）、あらゆるものを、  
九州大学医療技術短期大学部

特に人間を一元的に把握することをせず、矛盾対立というかたちにおいて捉えた点にあるであろう。それは、パスカルの人間を見る目の透徹性に由来するものと考えられたが、では、彼にこのような独自の観点を取らしめるに至った背景は何であったのだろうか。私は、その手がかりを、彼の「自然」(nature)についての見方の中に求めることができるように思う。そこで以下、パスカルの自然観に視点を当て、そこから導き出される諸々の問題の中に、その思想の基底にあるものを探ることを試みてみたい。

パスカルは「自然」(nature)について、つぎのように語っている。「自然(nature)は、たえず同じもの(même chose)をくり返す(recommencer)。年、日、時間、同じように空間(espace)は、数(nombre)もそうだが、端と端とがつながりあって続いている。一種の無限(infini)、永遠(éternel)というようなものが、そんなふうにしてできている。これらすべてのもののどれかに、何も無限なもの、永遠なものがあるのではない、だがそれら有限な存在が、無限に(infiniment)増加されてゆくのである。したがって、それら有限なものを増加せしめてゆく数のみが無限である、私にはそう思われる」(121<sup>1)</sup>)

ここに見られるのは、個別的差異性を奪われ、単なる連続する「量」(quantité)として捉えられた「自然」であろう。すなわち、それは言い換えるなら、「空間」(espace)ないし「延

長」(étendu)として、数量化への道をつけられた自然と行うことができるであろう。その点、上記のパスカルの言葉の中で、「数」と「量」とが同列に置かれ、ほとんど一つのものとして語られていることは、示唆的である。これこそまさに、自然科学の対象としての自然ではないだろうか。そして、このような自然像の具体的描写を、私たちはかの有名な「中間者」(milieu)についての断章(72)の中に見出すことができる。そこには、このような自然観が実にみごとなかたちで表現されている。だが、ここで注意されなければならないのは、上の引用の中で、新たな「無限」(infini)と「永遠」(éternel)の概念が立ちあらわれている点であろう。これらはいずれも、自然を「空間」と見、「数量」と見ることから必然的に由来したもので、その無限分割、無限連続の可能性は、自然からその神秘性を奪い取ったかわりに、全く別の意味でこれらをふたたび自然に帰属せしめたのであった。

だがそれにしても、上記の言葉を貫く調子に、つよい自負のひびきを感じ取られるのは、どうしてであろうか。その理由を探る鍵は、最後の一言、「私にはそう思われる」(ce me semble)にあるように見える。この一言のゆえに、それまで客観的真理ないし事実のように、断定的口調で語られていたことが、実は人間の見方に由来するものであることが明らかになる。そして、その見方こそが逆に、真理として告げられているのだということに気付く。つまり、このような言葉を裏付けているものは、人間への絶対的信頼の態度にはかなるまい。何もかも前提することなく、人間から出発し、そこに全面的に依存し、疑わない。したがって、そこにだけ真理の根拠があり、客観性の基盤がある。こうした態度こそが、上記のパスカルの言葉に気負いと熱とを与える原因となったのではないだろうか。実際、そのように見てくると、「パンセ」《Pensées》全篇を貫く一つの基調として、そうしたパスカルの姿勢にしばしば遭遇することに気付く。例えば、あらゆる前提や予見を排除し、生地の間人、真正の間人、人間そのものと

して生きることを標榜した《honnête homme》の主張(35など)の中に、「思考」(pensée)の偉大さを訴えた主張(346, 347, 348など)などの中に、明確にそれを見て取ることができる。

してみると、自然を「空間」ないし「延長」と見、その数量化を可能にした新しい自然観は、人間への全面的肯定の態度、人間から出発し、人間を中心とする態度と不可分に結びつくものと見なければならぬだろう。いやむしろ、そのような態度こそが、このような自然観を生み出したと言うべきか。言い換えるなら、自然科学の成立と人間中心主義(ヒューマニズム)とは、表裏一体の関係に立つと言ってもよいであろう。近世とはまさにそういう時代であり、パスカルの生きた17世紀半ばは、あらゆる点において、古い制約をはずされた新しい時代の潮流が音を立てて奔出しようとする時期に当たっていた。そのような観点からすれば、上に引用したパスカルの言葉は、彼自身による時代精神の端的な表明と見て差し支えないのではなかろうか。パスカルも時代の子であることを免れはしなかった。いやむしろ、自然科学者として当代の最先端を歩み、実験重視の態度に先見性すら示し得たパスカルなればこそ、一そう深く時代の懐に取り込まれていたと見なすことさえもできよう。上記の言葉は単に時代精神の表明ということにとどまらず、その頂き近くに立つものの確信に支えられているようにも思われる。

人間中心主義と新しい学、自然科学、パスカルの時代、そこには無限の可能性が開かれているように見え、これらを「固い地盤(assiette)と最後の変らざる礎(base)」(72)と見なし、そこに「無限(infini)に向ってのびゆく塔(tour)」(72)を思い描いたのは、パスカルとて同様であったろう。だが、この輝きの裏に潜む暗い影に、当時誰が気付き得たであろうか。パスカルといえども例外ではあり得なかった。だが、並はずれた彼の感性と洞察力とは、無意識のうちそこに射当て、彼の誠実は、その重きを一身に負うことを余儀なくされたのであった。以下、この点について考察をすすめること

## 上 田 富 美 子

にしたい。

パスカルにおいて、それはまず、新しい見方に立つ自然へのおそれとして予感される。すなわち、「私は宇宙 (univers) のおそれるべき (effroyable) 空間 (espace) が私をとりかこむを見る」(194)、「これら無限 (infini) の空間の永遠 (éternel) の沈黙 (silence) が、私をおそれしめる (m'effayer)」(206)、また、「ここに、私の見るものがあり、私を苦しめるものがある。私はあらゆる方面を眺める、そしていたるところに (partout) 暗黒 (obscurité) をしか見ない」(229) ここではまさに、「空間」(espace) と見られた「自然」ないし「宇宙」(univers) が、「暗黒」(obscurité) や「沈黙」(silence) として人間をおびやかす、おそれしめている点が着目される必要がある。なぜそのような事態が生じたのか。その原因は、自然ないし宇宙が、単なる「空間」と見なされたこと自身の中に求められねばなるまい。「空間」とは何か。それはただの空虚、空洞ではないか。あらゆる内実を奪い去られ、「空間」という名を与えられたときから、「自然」は人間にとって何ものでもなくなった。「空間」という規定は、実は何の規定でもあり得ない。それは、内容を喪失し、もはや「自然」とは呼ばれなくなったものの仮名に過ぎない。こうして自然は、人間によって「空間」と名付けられたときから、奇妙なことに、人間とは無関係な存在となる。両者の間には、越えがたい障壁がもうけられ、何らの交流もかなわない。パスカルはつきのように言う。「私の占める、私の眼に映りさえもする小さな空間が、私の知らない (ignorer)、私を知ってくれぬもろもろの空間の無限の広がりの中に沈み入るのを眺めるとき……」(205) と。つまりここには、「空間」というものの、具体的な人間にとっての無縁性が明確に言いあらわされ、またそのようなものに囲繞されている人間の、表現しようのない恐怖が暗示されている。自然は、宇宙は、「空間」という名によって人間から引き離され、断絶の彼方にうづくまる正体不明な不気味な存在者となった。それは、押し黙った完全な暗黒として、

人間の前に立ちほだかり、人間を不安におとしめ、おびやかす。何という皮肉であろう。あの輝やかなしい自然観の裏に、このように深い闇が潜んでいたとは。

この明るさが一瞬にして闇に転ずる壮絶なドラマの中に、パスカルは助けもなく身を置いた。上に引用したもろもろの言葉には、底知れぬ暗さとなり不明となった「自然」に裸で向き合った人間の、魂の底を揺るがすような畏怖が感じられる。またここで、さきに触れた「空間」の本性自身に由来する新しい意味での「無限」(infini) や「永遠」(éternel) が、かえって自然の不明の測り知れなさを、無限界性をあらわす言葉として用いられている点は、注目に値する。人間は、自らの設定した「空間」としての自然の属性に逆に拒絶され、この不明の淵の底知れなさにただおびえるほかないのである。それはまた、パスカルにおいて、自然科学の対象の無限性と人間能力の有限性との対比による無力感、あるいは徒労感として表明されてもいる。(断章82参照) 自然科学の興隆期に当るあの時期において、すでにこのような見解が見られることは、驚異というほかはない。

だが、こうした自然への名状しがたい畏怖は、更におそれるべき事態への予兆でもあった。自然のそのような在り方は、自然の中の存在者として「身体」(corps) をもった人間自身にも及んでこざるを得ないからである。人間だけが例外者であることはできない。身体性の側面から捉えられた空間的延長としての人間は、無限大と無限小の両極の間の「中間者」(milieu) として位置付けられる。しかもこの場合、空間と見なされた自然は、大の方にも小の方にも限界をもたないのであるから、人間は中間に位置するとはいえ、そこに定点を確保することができるわけではない。したがって、そこにおいて、人間は以下のような状況に置かれざるを得ないことになる。すなわち、「我々はたえず定めなく浮びつつ、一つの端 (bout) から他の端へと押しやられて空漠たる中間 (milieu) に漂う。いずれかの端に自分をつないでおちつこうとすると、そこはゆらいで離れてゆき、追えば手をの

がれてすべり去り、どこまでも逃げる。何ものも我々のためにじっとしていてくれない。これが我々の本来の在り方である」(72) このような自然の見方は、人間に確実性の「固い地盤」を保証してくれるどこか、すべてを相対の図式の中に投げ込む。また、人間は究極の不明ゆえに定点を与えられず、自らを固定することができないため、永遠のきすらい人に化さざるを得ないことになる。ここには、自ら設定した「空間」としての自然の中で、居所を失い、自らを把握することのできなくなった人間の姿が、痛ましく描き出されている。

ところで、このような空間的延長としての人間の不明性から、人間のすべての側面に及ぶ不明性、言い換えるなら、人間それ自身の不明性までは一步の距離しかないであろう。なぜなら、人間は本来、その部分を切り離せない存在者であり、身体的側面にかかわる問題は、ただちに人間そのものの問題につながらざるを得ないからである。身体といえども人間身体であり、ほかのものであるはずもない。したがって、空間としての自然の中での身体としての問題は、そのまま、暗い沈黙の自然の中での人間そのものの問題に置き換えられる。そこでは、単に延長としての人間ばかりでなく、まるごとの人間、人間そのものの不可解さが際立てられてくる。人間は、あれほど畏怖した自然の中で、最も身近で親しくあるべき自己自身を、自然同様の暗い謎としてきりもなく見失ってゆくほかはない。自然を「空間」と見、「数量」と見て自己に益するものとしたことの代償が、これほど大きいものだとなら誰が予測し得たであろうか。パスカルと同様だった。だが、彼はこのような自然観の真只中に身を置くことによって、明確に意識しないにせよ、このおそろべき問題の前に導かれ立たされていた。それは、以下のパスカル自身の言葉によって明示される。

「誰が私をこの世界 (monde) に置いたかを私は知らない。また世界とは何であるか、私とは何であるかを私は知らない。私は万事についておそろべき無知 (ignorance terrible) の中にいる。私の身体 (corps) とはどのようなもので

あるかを私は知らない。また私の感覚 (sens) とは、また私の魂 (âme) とはどのようなものであるか、それからまた私の語ることがらを考えるところの、そうしてあらゆることを反省 (réflexion) し、自分自身を反省するところの、しかし、ほかのものと同じく自分自身を知らないところの私の一部分 (partie) とは、何であるかを私は知らない。私は宇宙のおそろべき空間が私をとりかこむのを見る。私はこの広大なひろがりの中の一隅につながれている自分を見出す、そうして、何がゆえに、自分がこの場所 (lieu) に置かれ、他の場所に置かれぬのかを知らない。また私の生きるべきものとして与えられたこのわずかの時間 (temps) が、何がゆえに、私に先立つ全永遠 (éternité) と私の後からくる全永遠とのうち、この点に指定せられ他の点に指定せられなかったのかを知らない。私の見るものはただ、どこを見ても、ふたたび帰ることなく、一瞬のあいだ生きるにすぎない一つの微粒子 (atome)、一つの影 (ombre) のようなものとして私を閉じ込めている無限だけである」(194)

ここには、まず、空間として捉えられた「身体」(corps)の不明性に端を発して、それがつきつきと高次の精神能力に及ぶさまが描かれている。ただし、注目されなければならないのは、最高次のものとされている「反省」(réflexion)の能力さえも「部分」(partie)として空間化されている点であろう。つまりここには、本来、空間化が及ぶべくもない人間能力に空間化が浸透することによって、人間全体の不明化が完徹されることが示されている。さきに触れた人間そのものの不明性は、こうして成立する。人間の一部を空間と見なすことは、ただちに、人間全体を空間化することにつながる。ここには、おそろべき均らしの力がある。こうして人間は、まるごと、空間の中の只の一点となる。何の価値もなく、尊厳もない。しかも、大の側にも小の側にも無限であるこの空間の中で定位を与えられず、不明の大海の中に埋没してゆかざるを得ない。自分の置かれている位置は全くの偶然であり、何の意味もちらはしない。人間は、こ

## 上 田 富 美 子

の果て知れぬ空間に任意に置かれた点にすぎない。「何がゆえに、自分がこの場所に置かれ、他の場所に置かれないのかを私は知らない。また、私の生きるべきものとして与えられたこのわずかの時間が、何がゆえに私に先立つ全永遠と、私の後からくる全永遠とのうち、この点に指定せられ、他の点に指定されなかったのかを知らない」(194) こうして人間は、その存在感も存在の意味も完全に喪失し、ただの「影」(ombre)、一つのはかない「微粒子」(atome)と化する。このように見てくると、上記の引用は、まさに今までのパスカルの叙述の集大成に相当するものと言うことができよう。

さて、以上、「空間」として自然ないし宇宙を捉える新しい観点と、人間の在り方との関係について粗い素描を与えたが、ここでその成立の基点に立ち帰り、その構造をもっと大きなかたちで捉えてみたい。そして、それが、パスカルの主要な思想にどのように反映したかを見てみたい。結局、以上を通じて、最終的に私たちの手に残されたのは、巨大なニヒルとしての空間だけであるように思える。そこにおいて人間は、何ほどのものでもない、無でなければせいぜい「影」、それだけの存在でしかない。内実のない空虚が空間の本性であってみれば、それはけだし当然のことであろう。ここでは、空間こそが絶対ではないのか。だが、このような空間は現実にあるのではなく、人間が自然や宇宙からその内実を奪い、それを空無と見た結果成立したのであってみれば、それはあくまで仮定にすぎず、人間の見方こそがそれを支えているのではないのか。人間だけが先立つものであり、人間を措いて他に先立つものはない。してみると、絶対なのは人間の方であると言えはしないだろうか。その通りであり、だからこそ、空間は徹頭徹尾相対の地平となった。そこでは、すべてが相対的關係であり、またそれでしかあり得ない。したがって、「数」(nombre)という関係の徴表が思うさまそこでは駆使され、自然科学はそこに成立し育ち、多くの稔りをもたらした。だが、この相対の地平は成立するとともにひとり立ちし、本来絶対であるべき人

間を呑み尽し、反って彼を一個の相対と化する。ここに、空間こそが絶対となり、人間が相対となる転倒したかたちが出現する。こうして人間は、自ら設定したものに逆に支配され、その中に自らを喪失してゆく。仮定が現実となり、人間を縛りつけ閉じ込める。ここには、「疎外」(aliénation)の原初的なかたちがある。上にさまざまに描き出された、不明の空間に孤児のように助けもなく打ち捨てられ、おびえおそれながら、果てもなくさすらう人間の姿は、まさに、このような「疎外」の具現を示してはいないだろうか。ここにはまた、根元的な一つの矛盾の構造が同時に浮彫りにされる。そしておそらく、この構造こそが、パスカルの思想の基底に横たわるものであり、その反映が、諸々の独自の所説となって結実したものと考えられる。

例えば、矛盾対立のかたちが端的に保持されている、「偉大」(grandeur)対「悲惨」(misère)の図式で捉えられた人間の問題がそうであろう。上記のように、「身体」(corps)を具有する人間は、空間化の波を真向うからこうむり、遂に無意味な空間内の一点として自己を見失うしかないが、これは「悲惨」の極みでなくして何であろうか。だが、このような事態をもたらしたそもその所以が、自然を空間と見た人間の「思考」(pensée)の中に見出せるとすれば、この無前提的な観点は「偉大」と言うほかはない。空間の中にすでにまるごと取り込まれてしまった人間には、最早、このような「偉大」は求めらるべくもないにしても、完全に空間化され得ない人間の中の何か、少なくとも残滓のようなものとして人間には意識される。それがパスカルをして、「思考」と「身体」との関係を下敷にして、人間を「偉大」と「悲惨」の矛盾対立の究極の枠組みの中で把握せしめた原因と言えるであろう。そこに示されたつぐないのない分裂の深さと、偉大とされる「思考」の側に否応なく感じ取られる孤立感と悲壯感とは、このような前提を置いてみて、はじめてよく理解されることのように思われる。そこには、思考に偉大があると言われても、むしろ偉大であることが「不幸」であるような人間の姿が透

けて見えざるを得ないからである。(短大紀要第6号「パスカルの人間観」参照)

また他方において、人間の全面的肯定は当然のことに、人間の「欲望」(désir)をも全面的に解放し、それと同時に、自然や宇宙の空間化は人間をあらゆる面で相対のレベルに突き落とし、あらゆる価値を等しなみにし、いやむしろ、価値成立の基盤を奪い、これらすべてのことから、ここに無制約的な放恣の土壌が出現する。そこには何の規準も設けられてはいないのであるから、何をしても構わないし、何もしなくても差し支えはない。どのように動こうと動くまいと各々の勝手であり、歯止めはかけられないし、またかけようもない。こうして、人間特有のたがはずされた「欲望」が思うさま奔出し、無限の空間同様の大きさにまでふくれあがろうとする。人はそこで、何をどう呼ぼうとも全く自由である。仮りに悪を善と呼び、不幸を幸福と呼び、醜を美と呼ぼうとも。「まことの自然(vraie nature)が失われたので、すべてが彼の自然となる。まことの善(véritable bien)が失われたので、すべてが彼のまことの善となるように」(426) こうして、「道徳」(morale)のとめどもない頽廢は進行する。このような問題に関するパスカルの数々の指摘は、したがって、こうした背景を考慮に入れてこそ、一そうよく理解されることになりはしないだろうか。(短大紀要第4号「パスカルの懸獄について」24~25頁、短大紀要第6号「パスカルの人間観」16~18頁、短大紀要第7号「パスカルの人間観Ⅱ」19頁参照)

これらの例から判明なように、パスカルの基本的思想には、上に見たような自然観と、そこから必然的にもたらされる人間観との反映が見出される。言い換えるなら、パスカルの思想は、こうした基調の多様な変様であると見ることも可能であろう。パスカルは、人間の全面的肯定に発する、自然ないし宇宙を「空間」と見る見方を受け容れ、自らも数学者、物理学者としてその観点を十二分に利用し、大きな成果をあげた点で時代の子であることを免れなかった。だが一方、そのような状況の只中に自身を投入し、その状況を生き尽すことにおいて、その矛盾を

一身にこうむらざるを得ない結果に陥った。巨大な空間の中で踏み迷い、自己喪失の際に追いつめられた苦悩の中で、ひとり助けもなく打ち捨てられている人間像は、ほかならぬ彼自身の姿であると言っても過言ではないであろう。パスカルは自らの一身を以て、時代の新しい考え方をあがなった。矛盾分裂は、彼自身の生の中においてこそ、あらわにされたのである。自然科学者として、思弁を排し、つねに実験に立脚したその方法にふさわしく、彼は実に、自身の身を時代精神の実験に供し、そうすることによって、その限界を実証したのであった。時代の最も新しい方法を、われとわが身に適応したパスカルは、やがて、その方法自身によって時代を超える地点に立つ。それは、時代がそこに発した基点をこそ問うことであった。それは何か。ほかでもない、人間の自己に対する全面的肯定の態度である。これを彼は「自我」(le moi)と呼び、自己中心の態度をこそ鋭く詰問にさらした。(断章455、短大紀要第7号「パスカルの人間観Ⅱ」参照)<sup>2)</sup>そして、この人間に懸けられた「エゴ」の枠を取り払わないかぎり、迷妄の連鎖からの脱却はあり得ないと感知したパスカルは、そのような人間の在り方の中に「原罪」(péché originel)を見、「墮落」(corruption)と「贖罪」(rédemption)とを通じて人間を「神」(Dieu)へと結ぶ「キリスト教」(religion chrétienne)に、唯一の救いを求めようとしたのであった。しかも、そこへ導く有力な手だてとして、彼我の分裂をもたらさない「心情」(cœur)の問題が、ここに大きく浮上してくることになるのである。

以上を通じて究極的に私たちに明らかになったことは、自然科学の飛躍的展開をもたらした、自然を「空間」と見、数量化を可能にした観点そのものが、人間を排除し、その存立の基盤を奪い、人間を他のあらゆるものと同様に、無価値な空間内の一点に帰せしめる仕組であった。人間の尊重、その絶対的承認から出発した見方が、このような結果を招くとは何という矛盾であり、何という皮肉であろう。パスカルは、己れ一個

## 上 田 富 美 子

の実存を通してそれを実証した。そしていま私たちが、そのような状況の末端に連っていることはまぎれもない事実であろう。この早い時代の天才が、明確に意識しないままその一身であがない到達した帰結が、いま隠れもなくあらわにされようとしている。いまほど人間が、自己を無意味な「微粒子」、根を断たれ分断されたばらばらの個、孤独な幻影として実感している時はあるまい。存在感を失い、寄りすがる岸辺もないまま、いつ果てるとも知れぬさすらいに身を任せるよりほかに方法もない。また自身で張りめぐらした複雑にもつれ絡んだ網の中で、出口もなくもがき続けるより何の術もない。300年以上も前に、この光の裏に潜む深い深い闇を見落さなかったパスカルとは、いったいいかなる存在であったのだろうか。パスカルがその全生涯を賭けて問うた問は、いまこそ私たちを鋭く問いつめていると言えるであろう。彼は究極において、人間をすべての中心とする態度

こそを、迷妄の連鎖の根拠として詰問にさらした。それは彼にとって、人間を絶対とし、「神」にまでもなぞらえる「傲慢」(orgueil)の極みと映り、心底からの戦慄を誘わずにはおかなかった。パスカルの眼は、単なる時代を超えて、おそらく人間そのものにまで届いている。人間とは何か。この問題を懸けられた状況の中で、パスカルの残してくれた大きな遺産を手がかりとしながら、私たちはいまこそ、自身の方法で問いただしてゆかなければならないのではあるまいか。

## 〔註〕

- 1) 番号はBrunschvicg版の番号を示す。
- 2) またここで、「自我」による主・客の分裂を踏まえた、主観ないし「思考」の側の代表的能力としての「理性」(raison)も限界を問われることになるのは当然である。(短大紀要第5号「パスカルの賭けについて」14～16頁参照)